



なんでも新潟市 特徴のない町ね 黒崎で行政のバックアップはないし、でも、誇りは持ちたいわ 住むにはいいわね 住むというより寝る所かな 寝るだけじゃ文化は育たない ステツはいいかもね 老人クラブばかり



「黒埼の若者は定時制？」

声

みなさん、町で昼間、若者の姿を見ますか。「そう言われれば……」新潟市に会社（または、学校）があるから。では、黒埼町の若者が何を考えているのかわかりませんか。活気があるのでしょうか。

黒埼町の若者像。を昨年の秋（十月二十一〜二十七日）新潟県内研修旅行（県主催）に参加された仙波清美さん（緒立）と戸田久美さん（本場）に聞いてみました。

この土地で生きる

最初に研修旅行についてですが、仙波「私と戸田さんが巻の青少年研修センターに行ったときに、その研修旅行を知ったんです。戸田「それで、いっしょに行こうと……」

「どこへ行ったんですか。戸田「山形県の温海町、象海、天童市、秋田市などです。で、その青年たちと私たち（総勢十

三名）が交流したわけですよ。仙波（向こうは青年団が中心ですごく活発なんです。俺たちはこの土地で生きるんだ。っていう感じ）。

戸田「それに、町がバックアップして、ハッパをかけてるんですよ」。

「だいたい黒埼町とは違うようですよ。具体的に？」

仙波「いわゆるサークル活動。それから、選挙のときに公開質問状を出すんです」。

戸田「家庭でも、青年団活動などで遅く帰ってきたら文句は言わない。安心して。なぜかと言うと、親も昔、活動してたからなんです」。

*本町の青年団は本場、板井にあるが、活動はしていない。

新潟市が近すぎる

「ところで、仙波さんと戸田さんは何をしていますか。仙波「私は、ミスアンドミスターダンスクラブ（毎週木曜夜、体育館、会員五十名）を今年四月から主催しています。戸田「新潟市にあるレクリエーシ

ン研究会に入って、ゲームを学んでいます。秋に板井のものちつきを学校といっしょにやりました」。

他に何かサークルはあるんでしょうか。

仙波「それがわかりません。みんなしたい何をやってるのかしら」。

戸田「何もやってないんじゃないかな。なぜ、活動してないんですか」。

戸田「活動はしてるとは、ただその場所が新潟市なんです」。

仙波「昼間はみんな新潟市にいます。夜、もう何もする気がしない」。

戸田「学校、職場、サークル、遊び、みんな新潟。なによりも友だちが新潟にいます」。

仙波「友だちが新潟にいるのは大きいわね」。

黒埼中学校卒業は黒埼町よきよきうなら？

「黒埼高校ができましたが、大多数は新潟の高校ですね。戸田「そうなんです。学区が同じですよ」。

つまり、新潟市と黒埼町はたんに行政上の区分でしかない。戸田「ええ。とにかく、場が欲しい。場というのには文化会館みたいな建物じゃないんです。あれはいっぱいいるんですが。文化祭なら少しは私たちが参加し

たいし、手伝えるんじゃないかと。仙波「成人式も形だけじゃなくて、もっと交流の場にした方がいい。ただ、今の私たちにそれだけの力がないかもしれないし」。黒埼町という単位で若者がまとまる必要はありますか。戸田「でも、ここに生まれたいという黒埼に誇りを持ちたいし、誇りを持てる町にしたいと思うんです」。

仙波「とにかく、会う機会が欲しいとお互い願うくらいは知っています。いいと思いますね」。

いかがだったでしょう。また、黒埼町の若者について取りあげます。意見のある人はぜひ連絡をください。

仙波「とにかく、会う機会が欲しいとお互い願うくらいは知っています。いいと思いますね」。

紙面を開放
このように、今号から始めた「声」はみなさんの意見を掲載する場です。意見の内容は自由、形式も問いません。投稿は原稿用紙でもハガキでもかまいません。文章がながくてもかまいません。インクビューに行きます。匿名も認めません。電話を。黒埼町役場企業課。広報くろさき。黒埼町大野二八四三。七三三〇一。

豊かではないが、広大な中国



昨年の秋、新潟県農業者友好訪中団が中国を訪れました。参加者は百八人。新潟県の各市町村からは一名ぐらいが選ばれ、本町からは善久の白川八恵子さんが、一行は、十月十七日に日本を立ち二十四日に帰国するまで約一週間、上海、南京、杭州の各地を訪れました。

現地では、主に人民公社を見学し、中国農業の実際の姿を見ることができました。また、中国の人たちと友好を深めました。白川八恵子さんに、紀行文をお願ひし、遅くなりしましたが、今号で紹介いたします。

可能性のある国 白川 八恵子



広大な中国。その土地は驚くほど整備がいきとどいていて、自動車を通った道路の両端には、きれいにせん定されたプラタナスの木が植えられ、あたかも緑のトンネルのようであった。秋には散っているはずの落葉も、衛生班の手でそうじされていた。

中国では私たちのように個人で車を持つことはできない。交通機関は路面バスと自転車、バスは身動きがきかないほど満員であった。道路には、人民服姿の人でいっぱいなのだが、任婦や赤ちゃんの姿はほとんど見られない。それは、人口抑制のためにひとりっ子産児制限の効果の表れのようにだ。車は右側通行で、ブザーと警笛を鳴らしながら走る。夜になってもネオンなどなく、自転車はもちろん、自動車もライトをつけられない。また、標識も見あたらずどうしてか、と聞く、（中国では決められたことはきちんと守りま



中国の保育所の子供たちの歓迎

すから大丈夫です。」との答え。私たち日本人もそんな気持ちが必要と思う。

車の窓から見た建物の中には、レンガや石で造られた家も多く、こんな所に人が住んでいるのかと思ったりもした。

さて、私が訪中にもっとも期待していたことは、人民公社の参観交流である。私たちは三つの人民公社を見たが、ひじょうに組織化されており一つの町みたくであった。

人民公社には国家からそれぞれの仕事を与えられ、ノルマを達成したら残りは貯蓄になる。労働者には一人につき五アルほどの自留地が与えられ、作る作物は自由であり、できた作物は自家消費にあてられるとともに自由市場に出荷される。この自由市場が地域の住民の台所などだが、時間がなかったため見る事ができなかった。

どの公社も、熱烈歓迎で私たちを迎えてくれた。

中国の人は、化粧をほとんどせず、口紅一つつけていない。しかし、保育園の子供たちはかわいらしく着飾り、踊りや「桜」、「四季の歌」などを歌ってくれ、思わず胸にジーンとくるものがあった。

農家を訪問してみると、生活に最低限度必要な物だけというより何も言わないでよいほど質素だ。戸外の食事も、どんぶりごはんとその上にのせた少々のおかずです。立つて食べていた。私は考えてもみなかった。

それに比べて、私たちの中国での食事は昼からビール付きで高級料理が次から次へと食卓に並ぶ。もう少し、生の中国の生活を肌で感じたい気がした。日本の私たちの生活は、スイッチ一つで何もかもできる。そういう生活に感謝するとともに、いかにむだが多いかを見直さなければならぬと思う。

中国の農業そのものは、技術的にも物質的にも遅れている。そして、日本の高度な技術を求め、近代化を目差している。厳しい生活の中で、自力更生でがんばっている中国農民の姿には、むしろ私が学びたい気持ちであった。

帰国して、もっと事前に予備知識があれば色々詳しく知ることができたのに反省している。だが、たかさんの仲間と参観交流できたことを喜び、今回の体験を生かして暮らしていきたいと思ってる。

心配ごと相談の利用を、毎週土曜午後1時から役場二階

黒埼中学前駅1月1日営業開始 / 記念乗車券も発売。